

吉行淳之介〈編〉

yoshiyuki junnosuke

酔っぱらいの
最後の
読本

講談社文芸文庫

Kōdansha Bungei bunko



最後の酔っぱらい読本

yoshiyuki junnosuke

吉行淳之介〈編〉

講談社



文芸文庫

さいご
最後の酔っぱらい読本
どくほん

よしゆきしゅんのすけ

吉行淳之介 編

二〇一四年一〇月一〇日第一刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2・12・21 〒112-8001

電話 編集部 (03) 5395・3513

販売部 (03) 5395・5817

業務部 (03) 5395・3615

デザイン——菊地信義

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

本文データ制作——講談社デジタル製作部

©Kodansha bungeibunko 2014. Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部宛にお送りください。送料は小社負担にてお取替えいたします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文芸文庫出版部宛にお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。



ISBN978-4-06-290246-5

目次

酒と雪と病い

高橋和巳 九

月下独酌 月の下に独り酌む

李 太白 四

千日酒

阿川弘之 二四

千載一遇

阿部 昭 三九

忘れえぬアル中たち

なだいなだ 四二

酒

遠藤周作 五〇

酒

金子光晴 六三

こなから機嫌

里見 淳 六六

酒、歌、煙草、また女

佐藤春夫 七三

のんびりした話

もう一杯という名前のお酒

彼らの呑^やったあの一杯

舞台で酔う話

禁酒番屋——古典落語——

あなたも酒がやめられる

鬼ごろし／大麦製蒸溜酒

悪酒時代

文士と飲み屋

落款と陶器と酒

北欧の風物など

小沼 丹 七

和田 誠 八

小泉喜美子 九

戸板康二 一〇

桂 文治 一一

徳川夢声 一二

團 伊玖磨 一三

吉行淳之介 一四

河上徹太郎 一五

立原正秋 一六

藤枝静男 一七

架空対談——「あとがき」にかえて——

吉行淳之介 一四

解説

中沢けい 一六

著者紹介

一五

最後の酔っぱらい読本

yoshiyuki junnosuke

吉行淳之介〈編〉

講談社



文芸文庫

目次

酒と雪と病い

高橋和巳 九

月下独酌 月の下に独り酌む

李 太白 四

千日酒

阿川弘之 二四

千載一遇

阿部 昭 三九

忘れえぬアル中たち

なだいなだ 四二

酒

遠藤周作 五〇

酒

金子光晴 六三

こなから機嫌

里見 淳 六六

酒、歌、煙草、また女

佐藤春夫 七三

のんびりした話

もう一杯という名前のお酒

彼らの呑^やったあの一杯

舞台で酔う話

禁酒番屋——古典落語——

あなたも酒がやめられる

鬼ごろし／大麦製蒸溜酒

悪酒時代

文士と飲み屋

落款と陶器と酒

北欧の風物など

小沼 丹 五

和田 誠 八〇

小泉喜美子 六

戸板康二 一〇三

桂 文治 一〇七

徳川夢声 一三三

團 伊玖磨 一四三

吉行淳之介 一五三

河上徹太郎 一六〇

立原正秋 一六九

藤枝静男 一七六

架空対談——「あとがき」にかえて——

吉行淳之介 一四

解説

中沢けい 一八

著者紹介

一五

最後の酔っぱらい

最後の酔っぱらい読本

酒と雪と病い

高橋和巳

中国語に〈酒悲〉という言葉がある。酒に悲しみをまぎらそうとし、かえって酒に悲しみを倍加させてしまうという意味にもちいられる。たとえば、中唐の詩人・白居易の詩に、

誰か料^{はか}らんや 平生 狂酒の客
如今 却って 酒悲の人となるを

と歌われるのがその一例である。

もちろん中国にかぎらず、人のいるところには必ず、葛藤と悲哀はあり、酒のあるところ

ろにはまた必ず、忘我と、それに背反する酒の悲しみというものがある。ドストエフスキ
ーの『罪と罰』に、ソーニャが売春によって得た金をまきあげた父のマルメラードフが、
居酒屋でとぐろをまきながら、「わしは人よりも二倍くるしみたいからこそ酒をのむん
だ」と呟く場面がある。これなどは魯迅の「孔乙己」のいたましい結末とならんで、救い
がたい酒悲のかたちの双璧というべきところだろう。

印度のソーマ神にせよ、ギリシアのバッカスにせよ、酒に関係する神格は、ほんらい、
悪魔的な躍動や歓喜、あるいは忘憂を意味するものである。その酒精が、逆に悲哀の伴侶
となるのは、おおむね人生のなかばをすごした中年期より以後のことだろうが、社会が複
雑化すれば、知らずともよい感情に年わかくしてなずむということにもなる。

そして酒精のもつ魔性は、この〈酒悲〉の感情がわかりだすところに、加速度的に膨脹す
る。一宵の宴席に酔いしれ、床の間を便所とまちがえたり、高歌放吟、その酒量の多さを
ほこったりしているあいだは、まだ無邪気な段階なのであって、まかりまちがえても、翌
日、保護所の門をでるころには正常に復している。いや、こうした〈狂酒〉の段階では、
酒はむしろ誇大妄想的にはたらくものであって、有名な「酒徳の頌」をかけた晋の劉伶な
どはかつこうの例であって、人がおとずれて裸でねていた彼の失礼さを難詰すると、「宇
宙はわしのふんどしのようなものだ。のこのことわしのふんどしの中にはいってくるな」
と言ったという。

だが《狂酒》から《酒悲》の段階に移行すると、こんどは自分が無限に小さな存在にかんじられはじめる。つまり酒によって己れみずからを知ってしまふのだ。そして一人であるように酒をのみ、茫然と虚空に目をそそいで、なにかひとり言をしたりするようになりだすと、もう軽犯罪法ではいかんともしがたい状態になっているとみてよろしい。「いいお酒ですな」と人に感心されるようなのみかたが、あんがい静かな絶望の表現であつたりする。

酒歴はそうとうに古いせいもあつて、幸か不幸か、私はさいきん《酒悲》の段階にたつしつであつたようだった。特定のいらだちの原因があるわけではなく、また自分の現在の状態がはなはだしく不満であるというわけでもない。にもかかわらず、二六時中、胸中に木枯が吹き、眼前の一杯の酒によつてそのうそ寒さを忘れようとする。しかもかえつて滲みとおるような寂漠感のなかに埋没してしまふのである。医学的にいえば、一種のノイローゼなのだろうが、芳醇な酒というものが一役かつているだけに、酒の味がそうであるようにその悲哀の味もまた複雑なのだ。ざんねんながらそれは、芸術家きどりの軽薄男子が複雑そうにみえて、しばしば内容は空虚であるという状態にはなはだにている。

ひとたびその状態にたちいたると、しかし無限に悪循環するのであつて、自分ひとりの意志力ではその循環をたちきれないから困るのである。なにか突発的な事故がおこるか、でなければなかば強制的に自分をべつな環境にほうりこんでしまふかでもせぬかぎり、容